

闇の中の檸檬 : 若き日の三谷昭と「俳句月刊」

Imaizumi, Yasuhiro / 今泉, 康弘

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

81

(開始ページ / Start Page)

37

(終了ページ / End Page)

44

(発行年 / Year)

2010-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010192>

闇の中の檸檬

—若き日の三谷昭と「俳句月刊」
みたにあき

暗がりに檸檬浮かぶは死後の景

三谷 昭

少年時代の三谷昭は熱心な投書家（投稿家）だった。高柳重信はこう記している。

投書家時代の三谷昭は、それこそ何にでも手を出した感じで、小説や評論などの散文をはじめとして、詩や短歌も書いているが、皮肉なことに俳句だけは無縁のままになっていたのである。

〔三谷昭について思うこと〕、

「俳句評論」一八二号・一九七九・六

昭がそのように熱心に書いては送っていた理由は、「心の寂寥をまぎらわそう」としたためであった（「自己を語る」、「現代文芸」一九二九・十一。「三谷昭俳句史論集」所収）。しかし、そのことはなかなか叶わなかった。「自分の進むべき道を見出

だすまでは、やはりそれを続ける心算でいる」（同）と、十八歳の昭少年は記した。

「俳句だけは無縁のまま」、若き三谷昭は一九三〇年（昭和五）、小さな出版社・素人社（そじんしゃ）へ入社し、翌一九三二年二月創刊の「俳句月刊」の編集を手伝うことになる。昭、満十九歳のときである。その同誌創刊号に「石楠」の俳人たちによる座談会が載っている。この座談会において昭は筆記役をつとめたのだが、「花鳥諷詠」という言葉が「一体なにを意味するものか、どういう文字であらわすものかまるつきり分らないで難渋した」（素人社ものがたり①）、「俳句研究」一九六〇・一月二月合併号。このような俳句と無縁な青年（少年と呼ぶべきかもしれない）が、のちにその追憶記事において「全俳壇を視野に入れる幅広い眼」をもつ俳句史家として高く評価されることになる（高橋龍「書名のみ解題・三谷昭『俳句史論集』」、「面」九三号）。そのきっかけとなったものは「俳句月刊」であ

今泉 康弘

る。

一般に俳句総合誌のはじめは改造社の「俳句研究」（一九三四年三月刊）であると思われている。だが、その三年前に金児かねこ杜鵑か花かによって「俳句月刊」は創刊されている。三谷昭の言葉によれば、同誌は「改造社の『俳句研究』による俳壇ジャーナリズム確立以前の、未開社会二に登場したのである。同誌の「創刊の言葉」には「俳壇の公器として、不偏不党厳正批判を標榜し」、「総合俳句雑誌として一望の下に俳壇の動静がわかる」とある。だが、ひどく貧乏な出版社であったため、原稿料をちゃんと払うことができない。そのため、社主である杜鵑花に対して好意的な人に多く依頼がいくようになり、総合誌としてのパランスを欠くようになる。やがて、改造社という当時の一流出版社が「俳句研究」を出すことによって、「俳句月刊」の発行部数は激減し、一九三四年八月号をもって廃刊にいたった。山口昌男風によれば、「俳句月刊」は「挫折」の俳句史一の一幕を飾ったことになる。だが、先述のように同誌は「花鳥諷詠」という言葉を知らなかった一青年が、「俳壇でも有数の散文の書き手」（前掲・重信の文）へと育っていききっかけとなったのである。

その際、大きな意味を持つのは同誌に連載された「俳壇風聞録」である。「俳壇風聞録」は幡谷東吾が「素人社時代の三谷昭」（「俳句研究」一九七九・四）の中でも引用している。だが、もっと多く紹介されても良いと思われるので、それと重複しないものを選び、若き三谷昭の仕事として引用し紹介したい。

「俳壇風聞録」は、今日の俳句総合誌における「俳誌月評」

欄に相当する。「俳句月刊」は「一望の下に俳壇の動静がわかる」誌面づくりをめざしていたから、「俳壇風聞録」はその一環であり、もっとも同誌らしさのある記事であると言える。創刊号の同欄によれば、「俳諧雑誌」（一九一七・三〇）誌における「俳壇見聞録」（長谷川春草筆）に範をとったものであるという。「俳句月刊」の「俳壇風聞録」は第一回目を杜鵑花が担当している。ついで長谷川春草や島東吉が担当することもあるが、杜鵑花によるものが多い。三谷昭は一九三二年（昭和七）十一月号で初めて同欄を担当する。そのときは杜鵑花と共同である。翌一九三三年三月号より昭の単独での担当となり、以降終刊号まで昭によって一年半続く。

まず、杜鵑花の書いたものを一つ引用しよう。

ホトトギス二月号「露を見る」といふ一文の中で素十氏は
虚子氏の句

千二百七十歩なり露の橋

を評して曰く「これは単なる事実の報告ではない。朝早く新潟の万代橋を歩いた時の虚子先生の実感がにじみ出ている佳句であると思ふ。『千五百八十歩なり』では俳句にならないと思ふ」と。このデリケートな感じの相違が判りになりま

すか。

（一九三一年三月号）

ここでは「ホトトギス」をやりわりとからかっている。「俳句月刊」は反「ホトトギス」ではなくて、単に「ホトトギス」の

協力が得られなかっただけ（三谷昭他「綜合俳誌の今昔」、「俳句研究」一九七五・八）とのことだが、結果として、この文は「ホトトギス」に対する「俳句月刊」の態度を象徴していると思われる。

「ホトトギス」以外にも、例えば創刊号の同欄では「石楠」「都新聞」「曲水」「春泥」「筑波」「辛夷」「海紅」「層雲」「青壺」等々、さらに川柳のことまで取り上げている。毎回、少なくとも三十誌ほど、多いときには七、八十誌ほどをとりあげて、短いもので二行、長いときは数十行かけて、各誌の記事内容、動向などを紹介する。三谷昭は、はじめこのような記事の整理、割付、校正を担当していたはずである。そのことは彼に俳壇及び俳句について多くの知識を与えたであろう。さらに「俳句月刊」には、「前月重要記事目録」と「俳壇真珠抄」（前月俳句抄）という欄がある。「前月重要記事目録」は名前通り、各俳誌ごとに評論・随筆・考証などの文章の題名と筆者名のみを一々数件ずつ紹介するものである。毎月、五十〜百誌ほど取りあげている。「俳壇真珠抄」は各誌からすぐれた作品を紹介するもので、各誌二〜三句ほど、三十〜数十誌を取りあげている。

これらの記事に加えて、他の様々な記事についても、単に割付や校正のみだとしても、それらを目にするることによって、「花鳥諷詠」という言葉さえ知らなかった青年は次第に、俳句の世界に深く引き込まれていくことになったのである。昭自身、素人社時代についてこう回想している。

それで私も多くの俳句雑誌を目にする機会にめぐまれて、

俳句に関心を持つようになった。

（三谷昭「俳壇は乱世の時代だった」、

『俳句のすすめ』有斐閣選書、一九七六）

それに加えて、杜鵑花自身が俳人でもあるし、また昭は編集者として様々な俳人に接するわけでもあり、そこからの影響もあっただろう。さらに、素人社は俳句の本を主とした古本屋を兼ねていたこともあって、昭青年の毎日は俳句漬けであったと言えよう。様々な傾向の俳誌に触れるという点では、当時の杜鵑花と昭はホトトギス発行所を越えて日本一だったのではない。西東三鬼は、素人社時代の昭を知る友人として昭の性格についてこう記している。

これは彼が早くから、当時唯一の俳句綜合誌の編集をやられ、無数の俳句を朝から晩まで読まれたために、俳毒が全身に廻って骨にからんだからであろう。

（三鬼「俳友記——三谷昭の巻——」、

『俳句研究』一九五二・十）

もともと昭は、素人社に入る前から文学青年だった。昭が素人社へ入ったのは、同社発行の「現代文芸」誌に投稿をしていたという縁である。したがって、杜鵑花は昭の文学的才能を知っていたのだから、例えば「俳壇真珠抄」の選出を昭にまかせ、などということも早くからあったのかもしれない。そのようにして、環境によって得た知識・見識と、投稿で磨いた才能とが

あいまって、しだいに「風聞録」を執筆するに足る力をそなえていったのだろう。

こうして昭は一九三二年(昭和七)十一月号の「俳壇風聞録」に杜鵑花と共同という形で初めて執筆する(といっても昭が全体の八割を担当)。その号の昭筆のものを引用する。

「和田」には「みすゝかる信濃の国」と題する秋桜子氏の紀行文が載つてゐるが、清楚な筆の間にも山への愛着と云つたやうな気持がしみじみと流れてゐるやうに思はれて、まことに快い文章である。今月の「馬酔木」に載つてゐる(白樺を幽かに霧のゆく音か)と云ふ句風を私は非常に愛好する者だが、あの句もやはり此の紀行の折に獲たものであらう。

昭のこの文章は、一九三〇年代前半、新興俳句の青春期において水原秋桜子の作風が、「馬酔木」以外の青年にも「非常に愛好」されていた、ということの同時代資料である。なお、同号の「俳壇真珠抄」には「馬酔木」の欄に秋桜子の上掲句が載つてゐる。ということは、この時点で「俳壇真珠抄」の選出は昭が担当していたと思われる。また、「俳壇風聞録」を作成するには各誌の主要記事に目を通すわけだから、「前月重要記事目録」も昭が作製に大きく関わつていたはずである。

そして翌一九三三年(昭和八)三月号から、昭は単独で「俳壇風聞録」を担当する。同号から二つ引用しよう。

◇吉岡禪寺洞氏の最近の動向には尠なからず注目すべきもの

がある。本号「天の川」の「観照異心」と題する一文も、氏の立場を鮮明に示した点に於いて好感の持てる文章である。即ち氏は、最近の俳句が十七字詩型の中に於いて、かつては予想もしなかつた表現の拡がりを持つて来た事をあげて、季題趣味のそれは一種の茶人的思藻線内に溺れてゐるものであると述べ、素十氏の「探梅や枝のさきなる梅の花」の如きは自然を玩弄して飽きざるところの哀れなる陳套図繪である、とまで極言してゐる。(略)氏がホトトギス圈内にありながらホトトギスの制肘を受けずして、自己の主張を明瞭に示した態度をよしとしたい。

◇冬葉氏等の保守的態度に対比して、「かつらぎ」「馬酔木」等のグループがいよ／＼態度を鮮明にしつゝ、ある。「住む機械としてのホテル」——これは「かつらぎ」所載、誓子氏の詠草の題名である。

暖房や手洗場は水のしゞに落つ 誓子

戦後の「かつらぎ」からはあまり想像できないが、一九三〇年代前半、「かつらぎ」は「馬酔木」「天の川」について、新しい俳句を作つていく動きの一翼をなすものと見られていた。それというのも同誌は当時、山口誓子を客員格として擁していたからである。誓子が同誌に自選句として毎月発表する連作は当時の最前衛であった。ここで誓子の句、及び題名はモダニズムの旗幟を鮮明にしている。「態度を鮮明に」とはそのことである。当時の青年たちにおける「かつらぎ」への期待と誓子への憧憬を、昭の文章からうかがうことが出来よう。「天の川」と

禪寺洞に対しての「好感の持てる」「よしとしたい」という言葉にも、新しい俳句の動きへの共感が明確にあらわれている。

こうした動きは、のちに新興俳句と呼ばれるものへと向かっていくことになる。ただし、この二つの文章の時点では、まだ新興俳句という言葉は使われていなかったし、その概念も明確ではなかった。それが何なのかはまだ不明瞭だが、「注目すべき」、「かつては予想もしなかつた」何ものかが「いよ／＼」生まれつつある。そういう混沌としながらも熱い期待がここにある。そうした期待をこめて昭は、のちに新興俳句と呼ばれることとなるものの息吹を、この誌面につかまえようとしているのである。

だが昭は新興俳句系のことだけを「風聞録」に記していたのではない。「ホトトギス」及びその傘下の俳誌や、自由律の諸誌や、また「ホトトギス」と無縁の俳誌、時に新聞記事や政治家(松岡洋右)の俳句もとりあげている。そうした幅広いとりあげ方は杜鵑花から承継継いだものであり、終刊号まで続いていく。その例を引用する。

◇田村木国氏は「山茶花」に「両虚会見の報告」と題して、虚子氏が虚吼翁の病床を見舞はれた、その折の模様を記しているが、とかく誹謗の対象にされがちな、虚子氏の真情を見ることが出来て嬉しい読物の一つである。

(一九三三年三月号)

◇「筑波」では笠井辛城氏が「神水についての一考察」なる一文を執筆。神水とは、陰暦五月五日の葉の日(此の日一年

分の葉草を採集す)に雨が降ると、竹の節中に必ず神水があつて、これを獺の肝に依り丸とすると心腹の病を治す、といふ難解至極な季題であるが此の一文は、竹の節中に自然に水が貯ると云ふ現象が果して可能であるかどうかを考察したものである。

(一九三三年五月号)

こうして昭は「俳壇風聞録」「前月重要記事目録」「俳壇真珠抄」作成のために、様々な俳誌を毎月直接読んでいった。「俳句月刊」の仕事のために「三百」の結社誌を目にした、と昭は回想している(前掲「綜合俳誌の今昔」。各俳誌の評論・考証を要約し、紹介するという作業は、当然各誌をきちんと読みこまなくてはできない。その作業を通じて、各誌・各俳人のあり方をより正しく、より深く認識する見識と能力が育つたであろう。このような作業を通して、三谷昭は、「全俳壇を視野に入れる幅広い眼」を持ち、「俳壇史の理解に役立つような綿密で解説的な文章」(『三谷昭俳句史論集』あとがき)の書ける俳人として成長していったのである。

ただし、新興俳句に共感し、参加していく青年としては、様々な俳誌を読む仕事には、つらい面もあったようである。昭は「走馬燈」創刊号(一九三三年五月刊行)において、「俳誌漫筆」と題して次のようなグチを述べている。

世の中に何が多いと云つても、俳句の雑誌ほど数の多いものは余り無い。(略)世の中に凡そ意味がないと云つても、

俳句雑誌ほど意味のないものもそう沢山はない筈だ。サロンマ
ルキストよりも、ルンペンよりも、臍よりも意味ない存在で
ある。(略) むきになつて抗弁をする張合もないが、俳句雜
誌を読んだらと、第一に頭の調子が狂つて来る。こないだ
も「筑波」と云ふ雑誌を読んだら、「神水」と云ふものに
ついでに考察があつた。(略) こんなのも些さかどうかと思
ふ事柄だが、執筆者は大変マジメに考察されてをられるから
すこし偉い人だなと思はざるを得ない。いまに大学出のお医
者さんが、此の心腹の患者が舞ひ込むと、慌て、裏の竹藪に
出て神水を探つて来るやうなことになるさうだ。お医者さん
も竹藪の外科手術をする様になつては忙がしい。

この文章は「青鳳堂」という筆名で発表されている。当時、秋
桜子が「白鳳堂」という別号をつかつており、それをもじつた
ものである。ここにも秋桜子への意識が見える。「青」は、「青
二才」という謙遜にして「青雲」という自負であるうか。本名
ではなく筆名を使ったのは、素人社の社員としての遠慮からで
あろう。それでも昭はまだ言い足りないらしく、同誌の二号で
も同題の文をのせてこう述べている。

活気に乏しくてゴミ箱みたいな感じのするものはまず何と
云つても俳句雑誌である。

相当鬱憤が溜まっていたらしいが、ともかく、ルンペン以下に
せよ、ゴミ箱にせよ、実際に目を通した人間だから言える言葉

である。

翌一九三四年(昭和九)二月、西東三鬼が「走馬燈」の同人
となる。昭は、それまで俳句作品の方は本気で作つてはなかつ
たが、三鬼に刺激されて、同年五月号から同誌の同人欄に作品
を発表するようになる。つまり、作家として新興俳句運動に参
加することになった。こういう状況下の一九三四年、つまり「俳
句月刊」最後の年、「俳壇風聞録」には新興俳句台頭を物語る
記事が次々とあらわれる。

●京大俳句。岡康之氏は「馬酔木」「天の川」二誌の傾向を
論じ、二誌がホトトギスと反対の立場に立つて自由な批判を
発表することは即ちホトトギス陣営に刺激と反省を与へるも
のとして、むしろホトトギス俳壇強化のためには絶大な寄与
をなすものであるとなし、俳壇における自由主義的傾向を意
義あるものとしてゐる。

(一九三三年十月号)

●天の川。銀漢亭(禪寺洞)氏は誓子、秋桜子、白虹、影草
氏等のラグビーの句を評するに当たつて、

この種の作品には、たうてい私などでは手につけ難い題材
であると思ふものが尠くない。

と述べ(略)

(一九三四年五月号)

●土上。東京三氏は「連作俳句の新造船」と題して、例の草
城氏の「ミヤコホテル」を評して(略)一個の新造船として
の価値のあることを強調してゐる。

●句と評論。湊楊一郎氏「新興俳論の黎明へ」なる一文は、如是閑、誓子、井泉水氏等の俳論を論評し、筆致颯爽たるものがある。(略)

(同)

ここにあげた記事に共通している点は、各誌が他誌に対して批評をしていることである。新興俳句運動に関つた諸俳誌は皆、他の新興俳句諸誌との間で相互に批評を行なっている。また、川名大が詳しく調査したように新興俳句の作家たちは、結社(同人誌)を超えて、互いに影響を与えあっている。つまり、新興俳句運動には超結社性が強くあると言える。そのような超結社性が相互の批評として、上掲の「風聞録」の四つの記事にはあらわれている。

その際、そのような新興俳句の傾向が生まれるにあたって、「俳句月刊」の果たした役割は少なくないのではないだろうか。「俳句月刊」は「ホトトギス」全盛時代に、それにとらわれず様々な系統の俳誌をとりあげた。それを端的に示すのが「俳壇風聞録」である。新興俳句運動が、まず反ホトトギスとして起こつてくると、その動きが「風聞録」に反映する。すると、その記事がまた、様々な新興俳句作家に情報を与え、影響を生むという面があつたのではないか。ちなみに「京大俳句」一九三三年六月号には「俳壇プリズム」(平畑静塔)という記事があり、俳誌を二十一誌とりあげ、紹介・論評している。これは「俳壇風聞録」と全く同じ方法である。そこで取りあげている

俳誌の中に「俳句月刊」があることから、「俳壇風聞録」に示唆を受けたものである可能性がある。

このように「俳句月刊」は、「俳句研究」登場以前、新興俳句の生成において、情報を与え、相互批評をうながすものとして、ある程度の役割を果たしたと推測される。その程度とは具体的にどの程度なのか——それについては、あらためて資料を採して、別の機会に論証したいと思つている。

もし、「俳句月刊」が存続していたならば、昭は時おりグチを言いながらも「俳壇風聞録」を書き続けたであろうし、それはその後の俳句史の貴重な史料となつたであろう。そう考えると、「俳句月刊」なきあと、せめて改造社が昭を引き抜いてくれたら良かったのに……と思つてしまう。しかし、もし本当に改造社が懇請して頼んだとしても、また彼自身そのことに興味があつたとしても、昭は引き抜きに応じなかつただろう。彼は、杜鵑花の心中を察して、断つたに違いない。僕は三谷昭本人に会つたことはないが、彼の書いたものを読むかぎり、そう思えてならない。

昭は一九三五年、「扉」を経て「京大俳句」に参加、新興俳句の道をひた走る。そして一九三六年に素人社を辞める。素人社の経営難を考慮して、杜鵑花に負担をかけないように配慮して身を引いたのである。その二年後、金児杜鵑花が脳溢血で急死する。当時、杜鵑花は「俳句世界」という大衆向け俳句指導の雑誌を出していた。杜鵑花の葬儀の後のある日、昭は、「俳句世界」の主宰を引きつぐようと杜鵑花の親族から請われた。

その時のことを昭はこう記している（「素人社ものがたり（七）」）。

情としてはことわりきれないものだったが、私は最後までことわり通した。理由はきわめて簡単である。昭和十三年といえば「京大俳句」に参加して、新興俳句運動のために一身を捧げつくそうという気概にもえていたからだ。

かつて心に寂寥をかかえ、自分の進むべき道を探しあぐねていた少年は、素人社を舞台にして、新興俳句という自分の道を見つけた。そして、その道を進むべく、素人社を巢立っていったのである。

流鏑の日嘴を持つ人と遇う

昭

*

「補遺1」こまかいことだが、三谷昭の素人社入社時期について二説あるので検討してみたい。昭自身が「昭和四年」と記したり「昭和五年」と記したりしているのである。まず「俳句世界」一九三八年四月号（金児杜鵑花追悼号）所収の「おもひで」では素人社にいた期間を「昭和五年から十一年まで、足かけ七年」と記している。次に、「ポケット自伝」（「天籟通信」一九七一・二・七二・十二）では「昭和四年頃」としている。書かれた時期からして「おもひで」の方が素人社時代にはるかに近く、信憑性がある。「ポケット自伝」では入社時から四十年以上たっているし、「頃」という語も記憶のあいまいさを示すものである。

また、「自己を語る」（「現代文芸」一九二九・十一、昭十八歳のときの文章）では自身について「某新聞社勤務」と記している。つまり「昭和四年」の十一月の時点では素人社に入社していない。また、幡谷東吾は、新聞社の同僚として三谷昭に初めて遇ったときを「昭和五年」と記している（幡谷東吾「素人社のころ」、「俳句」一九七九・三、及び「素人社時代の三谷昭」、「俳句研究」一九七九・四）。これらから考えても昭の素人社入社は一九三〇年（昭和五）であろう。なお、昭は投稿少年として素人社へ顔を出していたらしいから、新聞社勤務時代から、併行するように素人社の仕事を手伝っていたかもしれない。それが「昭和四年」のことだとすれば、昭自身にとつては「昭和四年」から働いていたという認識もあった、ということだろうか。

「補遺2」昭は素人社を辞めたあとも、月に一回素人社で行われる句会に顔を出していた。同句会での作品は「霧笛会句鈔第1集」（一九三七・一）としてまとめられている。「素人社ものがたり（七）」によると同句会には西東三鬼も参加している。しかし、同句集を国会図書館で閲覧したところ、三鬼の句は無い。昭の句は十二句収められている。第1集しか作られなかったようだ。同句集から引用する。

蛇莓夏野を遠くわが来たり

昭

※本稿は、「夢幻航海」62号（二〇〇七・四）に掲載されたものに修正を加えたものである。

（いまいずみ やすひろ・二〇〇二年度博士課程満期退学）